

[年度]平成22年度和歌山県農林水産総合技術センター研究成果情報

[成果情報名]紀伊水道周辺海域におけるサバ類の漁獲動向と海況変化との関係

[要約]紀伊水道外域を漁場とする中型まき網漁業の魚種別漁獲量を整理することでサバ類の来遊資源動向を把握し、海況変化、特に漁場水温との関係について考察した。紀伊水道外域では1970～1980年代にマサバが優占していたが、1990年代からゴマサバの増加が顕著になった。

[キーワード]紀伊水道、マサバ、ゴマサバ、漁獲動向、魚種交替、海況変化

[担当機関名]水産試験場 資源海洋部 [連絡先]0735-62-0940

[部会名]水産 [分類]行政

[背景・ねらい]

紀伊水道周辺海域において、マサバとゴマサバは、中型まき網、一本釣、定置網等の漁獲対象となる重要な漁業資源である。周辺地域の沿岸漁業者にとって、魚価の高いマサバの減少は漁業収入の減少に直結するため、漁業経営上深刻な問題になっている。そこで本研究では、今後のサバ類の来遊資源動向を予測するための知見を得ることを目的とした。

[成果の内容・特徴]

1. 当海域では1970～1980年代にマサバが優占していたが、1990年代にゴマサバの増加と分布域の北上、マサバの減少がみられ始め、2000年代に入るとさらにこの傾向が強まり、2003年以降はゴマサバがマサバに替わって優占種となり(図1)、中型まき網漁業や一本釣漁業の漁家経営の悪化の一因と考えられている「マサバからゴマサバへの魚種交替」が、データ上から改めて明らかになった。
2. ゴマサバ来遊量の増加は、漁場の水温上昇(図2)と、近年におけるゴマサバ太平洋系群の高い資源水準(図3)を反映していると考えられた。
3. 両種の紀伊水道外域における来遊資源の動向と、マサバ太平洋系群の低い資源水準(図3)から、短期間でマサバの良好な加入を期待できる状況ではなく、今後数年間はゴマサバが優占する現況は続くと予測された。

[成果の活用面・留意点]

現在、マアジ太平洋系群が減少傾向に転じており、今後しばらくは当海域の漁獲主体がゴマサバとマルアジになると考えられるので、中型まき網漁業は効率の良い持続可能な漁業への転換を急ぐべきである。また、ゴマサバやマルアジのような多獲性魚種の有効利用について検討しなければならないだろう。

[具体的データ]

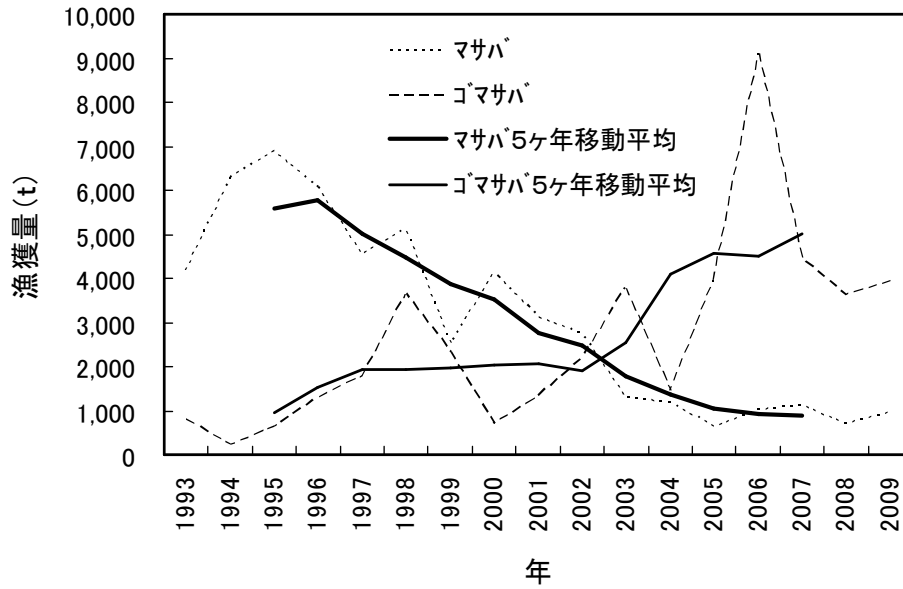


図1 紀伊水道外域におけるマサバ、ゴマサバ漁獲量の経年変化

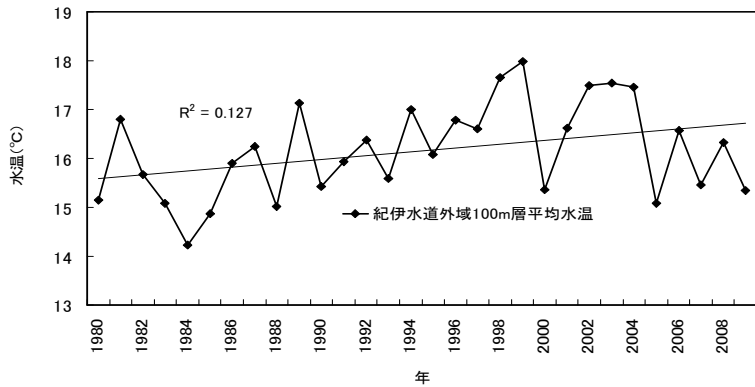


図2 紀伊水道外域における漁場水温平均値の経年変化

マサバ(太平洋系群)

資源水準

高 位
中 位
低 位

ゴマサバ(太平洋系群)

資源水準

高 位
中 位
低 位

図3 マサバ・ゴマサバの資源評価

(平成22年度我が国周辺水域の漁業資源評価より)

* 水準 (資源量や漁獲量の過去20年以上の推移)

[その他]

研究課題名: 資源評価調査事業

研究期間: 平成21～22年度

予算区分: 水研センター委託

研究担当者: 武田 保幸

発表論文等: 近年の紀伊水道周辺海域におけるサバ類の漁獲動向と海況変化との関係

(平成22年度水試研報に掲載予定)

HP掲載の可否: 可